

Consider:インタハイ県予選(決勝)から

質問: チームスタイル構築と分析の考え方

報告者: 池谷 孝

(清水エスパルス、県指導者養成委員長)

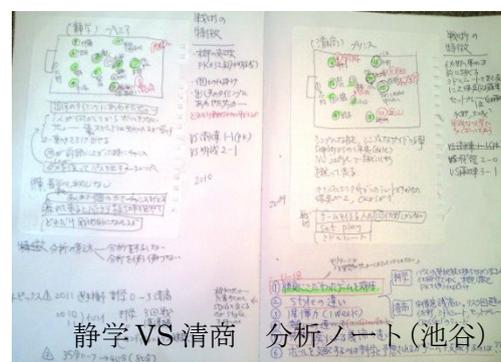
- 期日: 平成24年6月3日(日)
- 対象ゲーム: インタハイ静岡予選決勝静岡学園対清水商業
再延長PK4-2
- 報告対象者: U-18年代指導者

■目的

U-18年代のチーム作りのプロセス(チームスタイル構築)とゲームに対する準備(分析)に対する考察を重ね合わせ、みなさんにご意見を伺いたと思います。

また、指導者各人の自チームのチーム構築を再俯瞰してもらいたと思います。

ここでは、決勝線の2チーム、および個別かつ特定のチームのサッカーについてコメントする意図は毛頭ありませんのでご理解ください。



■ゲームの様相とチームスタイル、そして分析

チームスタイル(チームが持ち続けている戦術もしくはゲームイメージ)をどのように生かすか、分析をどう扱うかについて指導者の皆さんに考えていただきたいと思います。

静岡学園のショートパスをつないでドリブルで突破する(キャプテン渡辺談)スタイルと、清水商業の「決して上手ではないから一生懸命頑張る」をコンセプトに、守備の意識が高くすばやく前線に放り込んでこぼれ球を狙う、ミドルシュート、セットプレーからチャンスを作る、というスタイルの違い(に見えました)。前者を、局面を個人の技術が打開するサッカー、出し手のタイミングで行われるパスサッカー、後者を、パスミスが多さには目をつぶった、失点のリスクを回避したパワーサッカーというように私は見ました。

スタイルを持つことはサッカーというスポーツではとても重要であると思います。チームの全員がゲームのプレーイメージを共有することはパフォーマンスやその継続的な持続という意味でも大きなメリットがあると思います。チームのスタイルを持っているチームはある意味で大きなストロングポイントを持っています。

反対に、スタイルを持ちすぎる弊害についても考えてみたいと思います。ここではU-18年代のゲームということ意識して、「相手チームの分析」から見てみたいと思います。私の分析の考え方は3つです。ひとつは相手チームを分析するかしないかという判断、もうひとつはその分析を利用するかしないかという判断、そしてその分析をどのようにチームにプラスに働かせるかという戦術です。

日韓ワールドカップでトルシエ監督は分析をチームの戦術に積極的に使っていたように記憶しています。分析がベルギー戦でのディフェスラインの足の遅さを突いた稲本や鈴木隆行のゴールにつながったように思います。私のコーチ経験の中でも、選手権県予選の決

勝で相手のGKが前に出がちなポジションをとるというデータを、選手がロングシュートという形で生かし決勝点を奪ったことがあります。ジーコ監督は、これは当時のコーチングスタッフから直接聞いた話ですが、分析は行ったが、選手に伝えたりゲームのために使うことはほとんどなかったということでした。ドイツワールドカップでの結果とどのようにつながったかは定かではありませんが。

ここでもうひとつ考えたいのは、U-18年代の戦い方として、自分たちのスタイルで戦う、相手のサッカーを壊すために自分たちのスタイルで戦える状況になるまで相手のサッカーを壊す戦術をとる、あるいは失点のリスクを避ける戦術をとるという選択についてです。相手チームとの間に決定的な力の差がある時、力が拮抗している時、力が相手より上まわる時という条件によっても異なるのですが指導者のみなさんはどうしますか。

勝利のために、スタイルを守る、スタイルを崩すということは、分析をどう扱うかと密接な関係があると私は考えます。

これはジュニアやジュニアユースではユース以上に大きな問題ですが、もしスタイルを意識しすぎること、例えば、サッカーの原理原則の大局的判断を選手から奪うことがあるなら少々厄介であると思います。選手のサッカーが、与えられたポジションプレーに終了したり、それだけやっていたらよいという無判断のプレーによって多くボールを失うということが起こったり、ピッチの局所でサッカーが継続的に行われたりすること、あるいは、選択肢を持たないプレーをすること、ボール保持者に選択肢を与えない味方の不作為、選択肢を持ってプレーすることを否定する雰囲気などは選手のサッカーの向上やチームの進歩にプラスではないと思います。

また、スタイルとは実は生身のもので、戦術のオプションとも関係しているように思います。戦術のオプションとは、戦術、システムの変更と選手のオプションの準備などであると私は考えます。ミケルスの表現を借りるなら、「試合中の困難な状況に対応するための基本戦術の他に用意された戦術バリエーション」ということになると思います。

最後に、私が直接お伺いしたところ、静岡学園、清水商業とも指導者スタッフの方が、相手のサッカーは全く分析していない、対策を講じていない、自分たちのサッカーをやるだけ、相手に対応するサッカーがむずかしい(選手のクオリティ面で)、というようなことをおっしゃっていました。

指導者のみなさんは、スタイルをどのようなプロセスで構築し、どのようにゲームに生かし、分析をどのようにそこに乗せていくのでしょうか？

■理想のサッカーと身の丈にあったサッカー(チームスタイル)

モウリーニョは「理想のサッカーはひとつではない」と言っています。おそらくバルセロナを意識した発言だと思いますが、U-18年代のサッカーも、指導者の理想とするサッカーと選手個々のクオリティやメンバー構成と折り合いをつけてチーム作りを進める必要があると思いますがいかがでしょうか。

問題なのは選手のクオリティやメンバー構成の現実を無視した指導者のサッカーであり、また逆に、選手のサッカーが指導者のサッカーを超えている場合だと思っています。

指導者や選手は、どういうサッカーをやりたいということと、どういうサッカーならやれそうかという決断をどんなふうに行っているのでしょうか？

最後に個人的意見として、チームのスタイルとは、内的には、そのチームが伝統的に育んできたサッカー(監督)のイメージの上にその年々の選手の個性を乗せていく作業だと思いますが、外的には、相手のサッカーを想定外から想定内にする準備という作業が入るべきだと私は考えます。50パーセントの勝率を51パーセントにするという意味で。□